佛教大学　文学部論集　第106号（2022年３月）

論　文

近代知識人の日常生活と娯楽経験
――戦前・戦中の『王伯祥日記』を例に――

楊　　韜

〔抄　録〕

本稿は、商務印書館や開明書店の元編集者だった王伯祥の日記を対象に、彼の戦前・戦中の日常生活の実態を調査し、その娯楽行動のパターンを分析することを通して、近代知識人の娯楽経験のあり方を考察する試みである。王伯祥の娯楽経験は、主に昆劇や評弾といった伝統芸能、そして映画や話劇といった新興娯楽文芸と同時かつ頻繁に接触したものである。上演会場を訪れて舞台鑑賞するほか、自宅ではレコードやラジオ放送をも楽しむ、といった日常的なスタイルであった。王伯祥の娯楽経験において大きな割合を占めたのは、昆劇（曲）の鑑賞であるが、1937年以降評弾を楽しむことは増えていた。映画鑑賞の経験に関しては、「国産」の中国映画に対しては、王伯祥は当初に抱いていた悪い印象から徐々に変化し、1930年代半ば以降中国映画の進歩を評価する側に回った。一方、外国映画に関して王伯祥は、アメリカだけでなく、ドイツ・フランス・ロシア（ソ連）の映画作品にも関心を示し、それらの比較をしながら、内容の深刻さや作品の完成度などに注目していた。一方、新興文芸である話劇に対しては、王伯祥は基本高く評価している。そこから彼の新興文芸への理解と支持が見られるのである。

キーワード　『王伯祥日記』、昆劇、評弾、映画、話劇

1　はじめに

本稿は、商務印書館や開明書店の元編集者だった王伯祥の日記を対象に、彼の戦前・戦中の日常生活の実態を調査し、その娯楽行動のパターンを分析することを通して、ケーススタディではあるものの、近代知識人の娯楽経験のあり方を考察する試みである。本稿の構成としては、まず王伯祥の経歴及び『王伯祥日記』の情況を紹介する。次に、昆劇などの伝統文芸に触れる上で、映画と話劇の鑑賞を中心に、王伯祥の日常生活においてどのような娯楽経験をしたのか

について具体的に考察する。とりわけ、映画や話劇といった新興娯楽文芸との接触歴はどのようなものなのか、その際にどのような認識や評価を持っていたのか？を検討する。最後に、分析から得た結果を踏まえて、王伯祥という一事例から近代中国知識人の娯楽経験のあり方を概説する。

「日記研究」は思想史・文化史・社会史など、多くの研究分野において有効なアプローチだと考える。なぜなら、日記は、個人の（日常的かつ私的体験の）記録として私的領域に属するものだが、「一個人の生活史」という範疇をこえ、政治史・経済史・軍事史・社会史・文化史・思想史など様々な分野における研究に一定程度の参照価値を持っているものでもあるからだ。日々綴られた日記は、雑多な日常の記録であるだけでなく、繰り返してその時代のリアリティの細部を再現してくれる存在である。様々な人による多様多種な日記に刻まれているのは、多様性の富んだ経験である。本稿で用いるのは近代中国知識人の一人によって書かれた日記だが、それも間違いなく中国近現代史の歴史的な浮き沈みのなかで残された記録である。綴られた日記を通して、一知識人の日常生活における娯楽経験の実態や傾向を摑み、さらにそこから当時の知識人たちの文芸に対する認識や評価を把握するができる。故に、ミクロな視点から近現代の中国知識人のあり方を示すものになる。

『王伯祥日記』を考察対象として選んだ理由は主に以下の二点にある。一つ目は、『王伯祥日記』の「完整性」な側面である。次節で述べるように、欠落が少ないこと、日ごとの記録が持続されていること、長い年月をカバーしていることは『王伯祥日記』の「完整性」を示す特徴である。二つ目は、王伯祥本人の「一人の娯楽消費者」としての側面である。知識人の映画鑑賞や話劇との関わりなどに関する研究は少なくない。たとえば、菅原慶乃（2019）では、『澹安日記』・『陸潔日記』などを用いて、陸澹安・陸潔・郁達夫などの知識人の映画鑑賞の実践を詳細に考察している。また、邵迎建（2011）では、胡導・黄宗英・舒適などに対する聞き取り調査を通して、当時の知識人たちの映画・話劇との関わりを記録している。ただし、これらの研究において取り上げられているのは、ほとんど映画・話劇業界の人物であり、実際に映画の出演・製作あるいは話劇舞台の上演に直接に携わった当事者である。彼／彼女らと違って、王伯祥は大手出版社勤務の編集者であり、映画や話劇のようなエンターテインメント業界とは直接に関係のない人である。したがって、同じ知識人としても身分が異なり、映画や話劇といった新興娯楽文芸との（物理的・心理的）距離感も違うと言える。結果的には、「一人の娯楽消費者」としての目線から、業界関係者とはまたひと味違うような認識や評価をもつことになるだろうと思われる。無論、既存研究によって得られた当時の当事者たちの情報や証言などについては、『王伯祥日記』における記述との照合も行うことができ、実証研究としての精度を一層高める可能性もあることは言うまでもない。ちなみに、馬国棟・張廷銀（2019）、李俊・蘇芃（2021）、張廷銀（2021）など、『王伯祥日記』を用いた先行研究が徐々に現れているが、そのほとんどは王伯祥の古典書物の編集経緯や中国古代史研究成果に焦点を当てたもので

あることを付記しておく。

2　王伯祥と彼の日記について

(1) 王伯祥の経歴と彼の日常生活

王伯祥（1890～1975）は、江蘇省蘇州市出身の知識人であり、とりわけ出版人として知られている。王伯祥は地元蘇州にある中西学堂や蘇州公立中学を出たあとすぐに蘇州甫直鎮県立第五高等小学の教員として採用された。教員として勤務する傍ら北京大学国学系の通信研究員も務めた。その後、厦門集美学校や北京大学の教員として勤務したのちに上海商務印書館歴史地理部の編集者となった。商務印書館時代から、中国古典文学や中国史を中心とした分野の出版物の刊行に携わりその名声を高めた。1932年に商務印書館から開明書店へ移籍したが、中華人民共和国の成立後開明書店が青年出版社と合併して中国青年出版社となるまでの長きにわたり、文学史などの関連出版物の編集を継続した。1953年に鄭振鐸の誘いを受け、北京大学文学研究所（現在の中国社会科学院文学研究所）の研究員となり、1975年12月に死去するまで務めた。王伯祥の代表的な著作として、『三国史略』・『鄭成功』・『太平天国』・『中日戦争』・『史記選』・『春秋左伝読本』・『増訂李太白年譜』などが挙げられる。ほかに、『二十五史』・『二十五史補編』の編集や『唐詩選』の選注などにも尽力した。

王伯祥の生涯は書籍との関わりを持ち続けたものである。彼が綴った日記からも、そのような生活状況が伺える。王伯祥が商務印書館の編集者となって以降、1950年代初期までずっと上海に在住していた。彼の日常生活は極めて質素かつシンプルなものであった。商務印書館や開明書店へ出勤する時間帯においては、単行本や雑誌の編集をメーンに、ほかに自身の論文執筆や知識人との意見交換などに時間を費やした。開明書店時代には、社内の管理役となっていたが、社内の運営会議や行事などにさほど興味がなくよく欠席していたことも、日記から分かる。勤務時間以外は、自宅での読書のほか、家族や親しい知人たちと一緒に出掛け、お芝居（昆劇や話劇など）と映画を鑑賞することも多かった。また、天候や戦乱などによって外出を減らした時期には、よく自宅でラジオ放送・蓄音機・レコードを利用して、様々な娯楽を楽しんでいた。日常の家事などは基本妻の秦珏人に任せきりだったが、家族思いの王伯祥が、家族の病気などにも気を配り世話をすることが多かったことも日記から見て取れる。

(2) 国際都市上海ならではの娯楽環境

王伯祥の日常生活における娯楽経験を分析する前提の一つは、つまり彼が生きた時代（ここでは主に1920～1940年代）と場所（上海）においては、様々な娯楽を経験できる背景／環境があったということに尽きる。ここでは、簡単にその背景／環境について述べておきたい。

「東方のパリ」と呼ばれた上海は、近代中国最大の商業都市である。上海を「多国籍都市」

と称する榎本泰子は、上海の近代化／国際化をその人口変動との関連性から指摘している。上海全体の人口は、1900年に100万の大台を超え、当時ロンドン、ニューヨーク、東京、ベルリン、パリについで世界第６位の大都市となった。1930年には300万を突破し、うち外国人の数は最も多い時で15万人に達し、国籍は58に及んだ[(1)]。そのうえ榎本泰子は、上海を「娯楽と歓楽の街」としての特徴に注目し「上海における中産階級の中には、外国人もいれば中国人もいた。こうして少数の金持ちだけでなく、より幅広い市民を対象とした娯楽産業、サービス産業が発達していった。ショッピング、飲食、演芸、映画、そしてナイトライフ[(2)]。（中略）中国人の富裕層や知識層にとって、高級映画館にハリウッド映画を見に行くことは、都市のモダン文化に浸ることであった[(3)]」と述べている。王伯祥も当時の「高級知識分子」、すなわちエリート知識人として例外ではなかった。彼の日記から、彼自身だけでなく、その家族や親族の多くも日ごろから様々な娯楽を積極的に享受していたことがよく分かる。逆に言えば、国際都市上海ならではの発達した娯楽環境が彼らの娯楽消費活動を可能にしたわけである。

さらにもう一つ無視できない要因として挙げられるのは、当時上海におけるレコード産業ならびにラジオ放送産業の発達である。1908年に、上海初のレコード会社である東方百代唱片公司が成立した。1920年代以降、東方百代唱片公司から改名となった上海百代唱片公司、勝利唱片公司、大中華唱片公司といった大手三社のほかに、複数の中小レコード会社も現れた。これらのレコード会社が発行したレコードには京劇のほか、評弾ものも多かった。たとえば、百代唱片公司の『白蛇伝』・『玉蜻蜓』、高亭唱片公司の『珍珠塔』・『三笑』、開明唱片公司の『哭塔』、勝利唱片公司の『描金鳳』などが挙げられる[(4)]。一方、ラジオ放送の勃興も上海人の娯楽の利便性を大幅に向上させた。薛理勇の研究によると、上海のラジオ放送の実験的開始は1922年冬の大来ビルディング屋上で行われた「空中伝音」に遡るが、1925年５月に放送開始した「開洛広播電台」は最初のラジオ放送局である。1935年時点に正式な営業許可を得たラジオ放送局は54局があった[(5)]。1920年代以降、多くの官営・民営のラジオ放送局は挙って音楽や評弾などの番組を放送していた。王伯祥はよく夜自宅でレコードやラジオ放送を聴いたが、その回数は数え切れないほど日記に於いて多数に上る。レコードを購入のほか、ラジオ放送番組を把握するため、時々番組表を購入したこともあった。たとえば、1932年９月15日に国華電料行から「無線電聯合節目表第４期」を購入した記録が確認できる[(6)]。レコード使用やラジオ放送受信の普及は、一般庶民が自宅での娯楽享受を可能にした重要な背景／条件だと言える。

(3)『王伯祥日記』について

王伯祥の綴った『王伯祥日記』は1924年分から1975年分まで現存している。約五十年間にわたり記録続けた日記だが、1941年末からの60日の間、即ち日本軍の租界制圧と上海全域支配との影響を受け、中断した時期があった。また、文化大革命の影響で、1966年８月31日から1973年２月３日の間も中断した。上記の二回の欠落の部分を除けば、五十年間にわたり毎日日記を

綴った。『王伯祥日記』の原本は現在中国国家図書館に所蔵されており、その復刻版（リプリント版）は2011年に出版された。さらに、2020年に『王伯祥日記（整理版）』が出版された。本稿で用いるのは2020年刊行された整理版である。

『王伯祥日記』は長期にわたって残った膨大な記録のため、その内容は極めて豊富である。日記の中には、王伯祥が見てきた国内外の情勢、上海における社会的動向、編集者としての仕事内容、中国古典文学や中国史の研究資料などが記録されている。また、王伯祥の交友関係、彼自身の憎悪愛好、親戚往来、家族／家庭の瑣事などまでも詳しく記録されている。

表１　王伯祥の娯楽経験の一部例（1924～1949）

種別	日記で言及された作品名／演目名（経験した時間と場所）	日記で言及された作品／演目の関係者・団体・機関など
昆劇（曲）	白羅衫（1925年、笑舞台）、思凡（1927年、徐園）、胡蝶夢（1927年、新楽府）、尋夢（1930年、大世界之新楽府）、玉麒麟（1932年、大世界之仙霓社）、跪池（1933年、湖社）、白羅衫（1933年、小世界）、浣紗記（1934年、大千世界之仙霓社）、描金鳳（1935年、仙霓社）、贈剣（1937年、大新仙霓社）、刺虎（1938年、東方書場仙霓社）、失約（1939年、仙楽仙霓社）	昆劇伝習所、昆劇保存社、新楽府劇団、仙霓社劇団、兪振飛
映画	中国映画：空谷蘭（1926年、東華大戯院）、上海三女子（1926年、卡爾登）、梅花落（1927年、中央戯院）、漁光曲（1935年、東海大戯院）、孔夫子（1940年、金城大戯院）、新閨怨（1948年、虹光戯院）	明星電影公司、聯華電影公司、任矜蘋、阮玲玉、王人美、白楊、呉茵
	外国映画：残花涙【Broken Blossoms】（1925年、恩派亜）、浮士徳【Faust】（1928年、卡爾登）、馬戯班【The Circus】、西線無戦事【All Quiet on the Western Front】（1930年、南京大戯院）、城市之光【City Lights】（1932年、上海大戯院）、人猿泰山【Tarzan】（1934年、百老匯）	塔斯社（イタルタス通信社）、蘇連倶楽部（ソ連クラブ）、美国新聞処（アメリカ新聞署）、亜細亜電影公司、明社、卓別林（チャールズ・チャップリン）
話劇	葡萄仙子（1924年、中央大会堂）、少奴奴的扇子（1924年、職工教育館）、黒蝙蝠（1926年、戯劇協社）、莎楽美（1929年、寧波同郷会）、卡門（1930年、中央大戯院）、女人与和平（1947年、辣斐戯院）、金玉満堂（1948年、蘭心大戯院）	南国社、中国旅行劇団、四十年代劇社、洪深、陳憲謨、兪珊、李健吾
評弾	双珠鳳（1928年、ラジオ放送）、双金定（1931年、ラジオ放送）、落金扇（1932年、ラジオ放送）、二度梅（1933年、ラジオ放送）、厳嵩做寿（1935年、ラジオ放送）、描金鳳（1937年、南園書場）、珍珠塔（1938年、跑馬書場）、英烈（1942年、愛文書場）、水滸（1944年、滄州書場）、珠塔（1945年、偉達書場）、楊乃武（1946年、ラジオ放送）、望郷（1947年、ラジオ放送）、七俠五義（1947年、大陸書場）、白蛇伝（1948年、大陸書場）、十美図（1948年、新仙林）、狸猫換太子（1949年、上海倶楽部書場）、三国志（1949年、麗都書場）	文明書店、国華広播、国民電台、中国文化電台、亜美電台、李伯康、黄静芬、楊仁麟

その他	関鑑子女史独唱会（1924年、青年会）、京劇「打漁殺家」（1926年、第一台）、書版展覧会（1931年、明復図書館）、マッジクショー（1934年、融光大戯院）、全国美展之広東出品展覧会（1937年、大新公司）、菊の展覧会（1939年、国貨公司）、瀋福文漆芸品展覧会（1948年、匯豊銀行）、歌舞劇「嫦娥奔月」（1948年、震旦大学付属女子中学校）、明社聯歓会（1948年、開明新村）、敦煌芸術展覧会（1948年、大新公司）、「聶耳逝去14周年紀念大会」（1949年、逸園）	鄧脱霊魔団、中国科学社、中英文化協会、国立敦煌芸術研究所、新安旅行団、育材学校舞踊団、関鑑子、馬連良、尚小雲、陳娟

出所：『王伯祥日記』に基づき、筆者作成。

3　日常生活における娯楽経験

(1) 娯楽経験の全体像

王伯祥の娯楽経験の全体像を簡潔に述べると、主に昆劇や評弾といった伝統芸能、そして映画や話劇といった新興娯楽文芸に同時かつ頻繁に接触したことである。上演会場へ訪れて舞台鑑賞をする以外、自宅ではレコードやラジオ放送をも楽しむ、といった日常的なスタイルである。王伯祥は古典文学に関する造詣が深く、早くから中国の伝統芸能（とりわけ昆劇や京劇など）に親しんできた。一方、中国古典文学と中国古代史を専門とする彼は映画や話劇といった新興娯楽文芸にも常に関心を持っている。映画と話劇については後述するが、ここではまず昆劇や評弾との接触情況について見ていこう。

王伯祥の娯楽経験において大きな割合を占めたのは、昆劇（曲）という中国伝統芸能の鑑賞である。これは、王伯祥自身の古典文学に関する豊富な知識や素養との趣向関係もあったと思われる。日記から最初に確認できるのは、1925年12月23日である。この日は葉聖陶と一緒に笑舞台へ行き、昆劇伝習所の若い弟子らによる上演を観た。そこで観た演目は『白羅衫』や『説親』などである。王伯祥は「彼らは若いが、これほどの舞台をこなせたことは大したものであり、貴重だ」(7)と評価している。日記から王伯祥はその後も、新楽府（笑舞台旧所）・大世界之新楽府・大世界之仙霓社・小世界・北京路湖社・大千世界之仙霓社・大新公司之仙霓社・東方書場之仙霓社など、昆劇が上演される各会場へ頻繁に足を運んだことが分かる(8)。また、王伯祥自身だけでなく、一家揃って「追劇（昆劇舞台を追いかける）」するなど、昆劇専門劇団を転々と追うほど熱心なファンであることも分かる。たとえば1937年２月以降、仙霓社の大新公司での公演は大反響を呼び、王伯祥や妻の秦珏人らも幾度となく観劇に大新公司へと訪れた。同年５月31日は仙霓社の大新公司における最終公演日だったため、王伯祥一家全員が総出で駆け付けた。しかも「夜場（夜間興業）」までどっぶり楽しんでいた(9)。

次に、評弾との接触情況にも触れてみたい。日記から分かるように、1937年以降、王伯祥の昆劇や映画などの鑑賞は徐々に減っていたが、代わりに「聴書」という行動パターンは増えていた。この「聴書」の対象は、評弾のことを指している。前述したように、上海におけるレ

コード産業やラジオ放送の勃興は一般民衆の娯楽接触の（地理的・金銭的な）ハードルを格段に下げることができた。言うまでもなく、レコードやラジオ放送を通して、評弾を楽しんでいた人口数は圧倒的に多い。王伯祥やその家族もその中に含まれる。しかし、王伯祥やその家族は自宅だけでなく、所謂「書場」、即ち評弾上演の専門的会場にもよく足を運んでいた[10]。王伯祥一家が主に訪れた会場や鑑賞した演目については、表１に詳しく示している。

昆劇や評弾、そして映画や話劇という四つのジャンルは王伯祥の娯楽行動の主要パターンだが、表１から分かるように、ほかにも外国人芸術家による独唱会、京劇・歌舞劇・芸術展覧会などの鑑賞もあった。また、商務印書館や開明書店の社内イベントにも参加し、そこでの様々な余興を楽しんでいた。日記では、開明新村で開かれていた明社聯歓会に言及している。周佳榮の研究によると、「明社」とは、開明書店の内部にあった同人互助組織である。明社の運営費は社員たちの給与からの出資と開明書店の補助金、さらに寄付金などからとなるが、主に社員の福利厚生の促進に使われている。明社は同人研修班を組織して、社内の知識人による講義が実施されていた。王伯祥も中国地理の科目を担当したことがある。教育的な取り組みのほかに、定期的にスポーツや文化などの康楽イベントも実施されていた[11]。王伯祥は開明書店の要職に就いた人物であり、彼とその家族も明社の活動に携わった。

王伯祥の娯楽行動には、個人で行ったことが多いが、家族や知人とともにした場合も少なくない。日記で言及された娯楽経験時の同伴者として、秦珏人（妻）、王濬華（長女）、王漢華（六女）、王漱華（七女）、王潤華（長男）、王滋華（次男）、王湜華（末子）、章雪村（親戚）、葉聖陶（知人）、鄭振鐸（知人）、豊子愷（知人）などが挙げられる。『王伯祥日記』では、王伯祥とともに娯楽へ出かけた人々のなかで、圧倒的に同伴回数が多いのは葉聖陶である。王伯祥の末子である王湜華が晩年に、王と葉の関係について長い回顧文を書いている。そこでは、王伯祥と葉聖陶の二人は若い時からの親友であり、のちにともに商務印書館や開明書店での同僚でもあったことを詳しく述べており、七十年にわたる二人の友情を讃えている[12]。

王伯祥とその家族たちは日常において頻繁に各種の娯楽現場へ足を運び、享受していたことから、娯楽に必要な経費を惜しまなかった価値観を持っていることが推測される。また、彼は早くから「日常必需品」として、自宅での娯楽に必要な最先端機器も買い揃えたわけだ。たとえば、文明書店で蓄音機やレコードを購入したこと[13]、蓄音機を購入してからすでに二回故障したため、その修理に銀元２元がかかったこと[14]も日記において漏れなく記録されている。

(2) 映画について

王伯祥の映画鑑賞経験について、主に彼の「国産映画」に対する評価の変化や諸外国の映画との比較という側面に焦点を当て考察したい。

日記から最初に確認できるのは、1924年１月１日である。この日は葉聖陶と一緒に阿普魯戯院へ行き、映画『逃犯』を観た。その後、２月８日に『鉄機影戯』というものを観たが、これ

について詳しい記述がないため、「幻灯機」による上映ではないかと推測する。そして1924年３月25日に、恩派亜戯院で（商務印書館の）自社撮影作品『大義滅親（大義親を滅す）』を観た。王伯祥はこの日の日記に「画面がぼんやりしてはっきり見えないところがあり、非常に不満だ。撮影技術に欠点があるだけでなく、ストーリーもでたらめが多く、まさに未熟かつ常識外れである。舶来品と比較すると、ため息をついて惜しむばかりであった。」[15]と綴った。さらに数日後にも「今度、もう一篇雑感文を書いて『大義滅親』の問題点を指摘したい。それは即ち、非合理性かつ常識に欠けることである」[16]と追記している。しかし当時、中国映画に対する低い評価を持っているのは決して王伯祥だけではなかったようだ。たとえば邵迎建の聞き取り調査のなかで、自身が映画俳優だった狄梵は「私は中国映画を観ないし、中国映画を見くびる」[17]とまで、はっきり述べている。

それでは、「国産映画」に対する評価について、王伯祥にどのような変化があったのか。少なくとも、1920年代においてはかなり悪い印象を持っていたようだ。1926年６月には中国映画に関する「悪評」を下していた。「卡爾登大戯院で映画『上海三女子』を観た。耐えられぬほど悪い。任矜蘋の作品だが、中国映画の前途をダメにしてしまう。終了前に退出した」[18]。この映画を観て中国映画に対する印象があまりにも悪かったせいか、その後半年以上も中国映画を鑑賞した記述が日記になかった。翌年４月に久々に中央戯院で映画『梅花落』を観たが、「この映画は明星電影公司の作品であり、観衆が多くひしめいているが、個人的には満足ではなかった。総じていえば、中国映画に関しては、『上海三女子』の時から「良くない」との結論を得ていた」[19]と再度「国産映画」に対する不満をあらわにした。このような認識を大きく変えたのは、数年が経った1935年だった。同年４月10日の晩御飯後、王伯祥は妻の秦珏人と一緒に東海大戯院へ行って王人美主演の映画『漁光曲』を観た。そこで阮玲玉の葬式関連のニュース映像も観た。当日の感想として、「名優阮玲玉の自殺事件については、一時上海で沸き立たっていた、彼女が恋のスキャンダル問題で死んだことを不憫に思い、張（達民）と唐（季珊）の二人の男との間に生じた訴訟のせいだと考える人も多いだろうが、実際に無頼の新聞記者によるでたらめな報道との関係もある。九時過ぎ、雨の中で帰宅した。長い間映画を観ず、偶に観ると、大いに進歩した気がする。聯華電影公司の作品は特に印象的であり、趣旨においてアメリカ映画を超えるだけでなく、技術面においても優れている」[20]と、これまでの「国産映画」に対する不満から一転してその進歩を評価するようになった。前述したように、1937年以降、王伯祥は外出を減らしたこともあり昆劇や映画を劇場で鑑賞することは少なくなった。1940年10月27日に、王伯祥は北京路にある金城大戯院で映画『孔夫子』を観た。「ストーリーに関しては検討すべき点もあるが、孔子の人格をよく表現できており、近年来の映画の中では傑出した作品である。下品な映画が多い目下、無論同列に論じることができない。惜しいのは、あまり上品だと、多くの一般観衆に受け入れられ難いだろう」[21]と再び「国産映画」に対する高い評価を下していたが、同時にこのような優れた作品としても一般民衆に理解

してもらうあるいは受け入れられることが困難だと惜しんでいた。

一方、国際都市上海では諸外国の映画がいち早く輸入され公開されていたが、王伯祥の外国映画に対する認識はどのようなものであっただろうか。1924年４月４日午後、彼は葉聖陶と一緒に出掛け、上海大戯院にて『乱世孤雛』を観た。「この映画はフランス革命時期の騒動の状況や、貴族の傲慢と奢侈ぶりを描いている。観た後深く反感を覚え、人類社会の虚しさを感じずにいられない」[22]と感想を記録している。1926年７月４日に上海大戯院で映画『風流女伶』を観た後、「この映画はドイツの作品であり、アメリカのものよりも遥に勝る。ここから推測すると、将来ドイツの映画はアメリカを上回るのではないだろうか？」[23]と、ドイツ映画とアメリカ映画の比較をしている。記者や話劇従事者だった舒湮は、当時の映画市場を「アメリカ映画の天下」[24]と述べているように、戦前の上海映画市場においては、アメリカ映画が圧倒的な割合を占めているが、王伯祥はアメリカ以外の欧州映画にも注目していた。1927年７月10日に王伯祥は葉聖陶と一緒に新中央戯院で映画『駅卒老涙』を観た。「この映画はロシア作家アレクサンドル・プーシキンの原作小説『駅長』に基づき製作したロシアの作品である。官吏や軍人の横暴ぶりと、労働者などの庶民たちの耐え忍ぶ様子がありありとスクリーンに映し出されているため、思わず比較して感慨せずにいられない！」[25]と当時は新生社会主義国家であるソ連の映画を観た感想を述べ、スクリーンに映し出されている階級間における格差や暴力にひたすら耐える民衆の様子から自国の現状を自ら連想する一場面も日記から見せていた。

外国映画の内容の深さを重視する王伯祥は、映画の製作レベル（ストーリー性や撮影技術など）に関しても注目する。たとえば、1927年10月８日に百星大戯院で映画『The Volga boatmen』を観た後、以下のように述べている。「この作品は即ち、広く宣伝されたが、一時租界の工部局によって上映禁止となった『党人魂』である。前半はまた良いが、後半はほとんど恋愛の話であるため、すでに激昂さが失われ、その高い名声に一致するとは実に言えない。もしかしてこの作品の製作会社は激しいシーンを削除していたかもしれないが、その取捨選択の痕跡が時々見られる」[26]と述べている。一方日記において、劇場の環境や設備に関する言及も幾度となくあった。とくに妻の秦珏人が劇場の換気の悪さに耐えられず途中で鑑賞をやめたことは何度も確認できる[27]。1927年11月20日に虹口にある毎日新聞社でフランス新派映画を観た王伯祥は、「九時から上演し、十一時半にようやく終了した。席の座り心地も悪く、内容もよく理解できなかった。強いて評価を下すなら、ただ「怪誕（奇怪）」の二文字のみだ」[28]と劇場と作品の双方に不満を抱いていた。チャールズ・チャップリンなど、有名な映画スターによる作品は多くの観衆を動員する。王伯祥も例外ではなく、チャップリン主演の映画『馬戯班（The Circus）』を観ている[29]。また、人気作品に対しても評価が高かった。たとえば、1934年１月３日の晩御飯後、百老匯大戯院で映画『人猿泰山（Tarzan）』を観た際に、「主人公のターザンは百獣を支配し、森のなかでは平地で歩く同様飛び上がり、川の中では鰐を殺し、さらにライオンや豹とも闘い、まさに神技の持ち主だ！鑑賞後、まったく疲れを感じなかっ

た」[30]と称賛を述べている。ほかに、ストーリー性に対する拘りぶりも複数回見られる。1930年９月30日午後、社員臨時大会が開かれるが、王伯祥は欠席し、葉聖陶と一緒に南京大戯院へ行き、映画『西線無戦事（All Quiet on the Western Front)』を観た。「この作品は戦争の凶悪さや残酷さを描く、まさに細部まで巧みに切り込んだものである。観衆として観ている間には手に汗を握り、始終緊張して呼吸さえも上手くできない」[31]と鑑賞中の緊張感を記録している。1933年２月19日、王伯祥はイタルタス通信社の招待を受け、上海大戯院でソ連映画『重逢』の試写会に参加した。「十時半から始まり、説明がないうえ削除の箇所も多いため、ストーリーはあまり分からなかった。しかし、精彩を放っているシーンも少なくないし、時には緊張感を与えてくれる。十一時四十五分に終了した」[32]と中立的な評価を下していた。

王伯祥の日記には、彼自身だけではなく、その家族が鑑賞した映画に関する記述も散見する。総じて言えば、「国産」の中国映画に対しては、王伯祥は当初に抱いていた悪い印象から徐々に変化し、1930年代半ば以降中国映画の進歩を評価する側に回った。一方、外国映画に関して王伯祥は、アメリカだけでなく、ドイツ・フランス・ロシア（ソ連）の映画作品にも関心を示し、それらの比較をしながら、内容の深刻さや作品の完成度などに注目していた。

(3) 話劇について

最後に、王伯祥の話劇舞台の鑑賞経験について見てみたい。王伯祥は、昆劇や映画と比べて、話劇を観る回数はそれほど多くなかった。反対に、彼の子供たちは十代となって一人で出かけるようになった1930年代半ば以降、かなり頻繁に劇場で観劇した。また日記から分かるように、彼の子供たちは学校や職場などで実際に舞台に上がって出演したこともあった。

日記から最初に確認できるのは、1924年１月６日である。この日の午後王伯祥は、葉聖陶ら四名と一緒に出掛け、北四川路にある中央大会堂にて実験劇社の公演を観た。「まずは、未来派の演目『換個丈夫吧（旦那を変えましょう)』だが、精妙さが見られず、学究派の悪評を呼ぶだろう。次は、児童劇『葡萄仙子（葡萄仙人)』だが、役者は皆小学生であり、台本作者は黎錦暉である。この演目は素晴らしくて観衆の注目を引き付ける。最後の演目は『良心不死』だが、碩民が帰ると言うので、観ることができなかった」[33]と詳細な記述を残している。同年５月３日に、職工教育館で戯劇協社による舞台『少奶奶的扇子』を観た。「八時四十五分開演、十一時四十五分終了、全部で四幕あり、大変素晴らしい。とりわけ、舞台セットがこれまでに上海では見たことのないほど上出来だった」[34]と評価している。その後1926年秋に新中央戯院で『第二夢』を鑑賞した後、「これは戯劇協社の洪深による作品であり、台本はすでに『東方』誌面に掲載されていた。舞台はかなり良く、とりわけ陳憲謨が演じる董国材は一層素晴らしい。この作品の内容は充実しており、じっくり吟味するに堪える」[35]と原作の優れた点ならびに主演者の演技力を高く評価している。さらに1930年６月13日に中央大戯院で『卡門』を鑑賞した際にも、「主演者兪珊は、昨年寧波同郷会が上演した『莎楽美』でも主演を務めた女性

である。舞台は確かに素晴らしい！三時半に開演、六時四十分に終了した」[36]と主演者を称賛した。

映画と同様、王伯祥の日記には、彼自身だけではなく、その家族が鑑賞した話劇に関する記述も散見する。総じて言えば、伝統芸能の昆劇や映画に比べての経験は少ないが、新興文芸である話劇に対しては、王伯祥は基本高く評価していると言えよう。とりわけ、台本・舞台セット・主演者の各側面においても細かく注目・観察し、観劇後惜しみなく称賛している。そこから彼の新興文芸への理解と支持が見られる。

4　戦乱下の状況について

戦前・戦中の『王伯祥日記』は長いスパンでの記録になっているが、戦乱下の状況にも触れてみたい。王伯祥が長きにわたり住んでいた上海は、市街地においては局部的な小規模戦争が幾度かあったものの、壊滅的な状態に陥ることは避けられた。主な戦乱は、以下の四つの時期に起きていた。即ち、第一次上海事変（1932年１月）、第二次上海事変（1937年８月）、日本軍の租界制圧と全域支配（1941年12月）、国共内戦末期の上海解放戦争（1949年５月）である。

上記の四つの時期においては、交通機関の乱れ・物流の中断・物価の高騰・空襲の危険など様々な危機によって引っ越しも余儀なくされたが、王伯祥は基本可能な限り出勤して、一家はいつもの日常生活を維持するように努力していた。娯楽施設の多くは租界のなかに位置していたためか、意外にも短期間の戦乱下においても普通に出かけることが可能だったし、しかも昆劇や映画などの鑑賞も実現できている状態だった。ただし、空襲などが頻繁に起きる時期には、ラジオ放送を聴いたり自宅でレコードをかけたりするなどで凌いでいたこともよくあった。

5　結びに

以上、商務印書館や開明書店の元編集者であった王伯祥の日記を対象に、彼の戦前・戦中の日常生活及びその娯楽行動の実態を考察した。王伯祥の娯楽経験は、主に昆劇や評弾といった伝統芸能、そして映画や話劇といった新興娯楽文芸と同時かつ頻繁に接触したものである。上演会場を訪れて舞台鑑賞するほか、自宅ではレコードやラジオ放送をも楽しむ、といった日常的なスタイルであった。

王伯祥の娯楽経験において大きな割合を占めたのは、昆劇（曲）の鑑賞である。彼は昆劇が上演される各会場へ頻繁に足を運んでいた。また、王伯祥自身だけでなく、一家揃って「追劇（昆劇舞台を追いかける）」するほど、昆劇専門劇団を転々と追うほど熱心なファンであることも分かった。1937年以降、王伯祥の昆劇や映画などの鑑賞の機会は徐々に減っていたが、代わりに評弾を楽しむことは増えていた。王伯祥やその家族は自宅でレコードやラジオ放送を通

してだけでなく、評弾上演の専門的会場にもよく足を運んでいた。映画鑑賞の経験に関しては、「国産」の中国映画に対しては、王伯祥は当初に抱いていた悪い印象から徐々に変化し、1930年代半ば以降中国映画の進歩を評価する側に回った。一方、外国映画に関して王伯祥は、アメリカだけでなく、ドイツ・フランス・ロシア（ソ連）の映画作品にも関心を示し、それらの比較をしながら、内容の深刻さや作品の完成度などに注目していた。一方、昆劇や映画に比べると経験は少ないものの、新興文芸である話劇に対しては、王伯祥は基本高く評価している。とりわけ、台本・舞台セット・主演者の各側面においても細かく注目・観察し、観劇後惜しみなく称賛している。そこから彼の新興文芸への理解と支持が見られるのである。

〔注〕

(1)　榎本泰子（2009）、12頁。
(2)　榎本泰子（2009）、88頁。
(3)　榎本泰子（2009）、96頁。
(4)　評弾もののレコードについて、上海市文化広播影視管理局（2011）を参照されたい。
(5)　薛理勇（2001）、155-158頁。
(6)　『王伯祥日記』、1932年９月15日。
(7)　『王伯祥日記』、1925年12月23日。
(8)　上海における昆劇の上演会場やその変遷については、胡平生（2002）や葉長海ほか（2011）を参照されたい。
(9)　『王伯祥日記』、1937年５月31日。
(10)　上海における評弾の主な会場・代表的な人物や団体の変遷については、胡平生（2002）や申浩（2014）を参照されたい。
(11)　周佳榮（2009）、152-154頁。
(12)　王湜華（2008）参照。
(13)　『王伯祥日記』、1928年８月13日。
(14)　『王伯祥日記』、1929年10月25日。
(15)　『王伯祥日記』、1924年３月25日。
(16)　『王伯祥日記』、1924年３月28日。
(17)　邵迎建（2011）、229頁。
(18)　『王伯祥日記』、1926年６月14日。
(19)　『王伯祥日記』、1927年４月24日。
(20)　『王伯祥日記』、1935年４月10日。
(21)　『王伯祥日記』、1940年10月27日。
(22)　『王伯祥日記』、1924年４月４日。
(23)　『王伯祥日記』、1926年７月４日。
(24)　舒湮（1988）、71頁。
(25)　『王伯祥日記』、1927年７月10日。
(26)　『王伯祥日記』、1927年10月８日。
(27)　戦前の上海における劇場の建築物や設備については、王敏ほか（2011）の第三章を参照されたい。
(28)　『王伯祥日記』、1927年11月20日。
(29)　『王伯祥日記』、1928年５月16日。
(30)　『王伯祥日記』、1934年１月３日。
(31)　『王伯祥日記』、1930年９月30日。

(32)　『王伯祥日記』、1933年２月19日。
(33)　『王伯祥日記』、1924年１月６日。
(34)　『王伯祥日記』、1924年５月３日。
(35)　『王伯祥日記』、1926年11月14日。
(36)　『王伯祥日記』、1926年11月14日。

〔文献一覧〕

〈日本語（五十音順）〉
榎本泰子『上海：多国籍都市の百年』（中央公論新社、2009）
大橋毅彦・関根真保・藤田拓之編『アジア遊学183　上海租界の劇場文化』（勉誠出版、2015）
菅原慶乃『映画館のなかの近代：映画観客の上海史』（晃洋書房、2019）
西川祐子『日記をつづるということ：国民教育装置とその逸脱』（吉川弘文館、2009）
西村正男・星野幸代編『アジア遊学247　移動するメディアとプロパガンダ』（勉誠出版、2020）
濱一衛『支那芝居の話』（弘文堂書房、1944）

〈中国語（ピンインローマ字順）〉
曹聚仁『上海春秋』（三聯書店、2007）
胡平生『抗戦前十年間的上海娯楽社会（1927～1937）』（学生書局、2002）
李俊・蘇芃「試述王伯祥『史記選』撰作経過及其特点」、劉躍進主編『古代文学前沿与評論　第６輯』（社会科学文献出版社、2021）
馬国棟・張廷銀「『王伯祥日記』的学術史料価値」、『文献』2019年第３期
馬学新ほか編『上海文化源流辞典』（上海社会科学院出版社、1992）
上海市文化広播影視管理局編『評弾』（上海文化出版社、2011）
邵迎建『抗日戦争時期上海話劇人訪談録』（秀威資訊科技、2011）
申浩『雅韻留痕：評弾与都市』（商務印書館、2014）
舒湮『愚昧比貧穿更可怕』（人民日報出版社、1988）
王伯祥著／張廷銀・劉応梅整理『王伯祥日記』（中華書局、2020）
王敏ほか『近代上海城市公共空間：1843～1949』（上海辞書出版社、2011）
王湜華「此情良不逾、与時俱綿延：葉聖陶与王伯祥両先生七十年的交誼簡述」、『博覧群書』2008年第８期
王湜華「略述家父王伯祥日記」、『博覧群書』2008年第８期
薛理勇『旧上海租界史話』（上海社会科学院出版社、2001）
葉長海ほか編『昆曲』（上海文化出版社、2011）
張廷銀「読『王伯祥日記』」、劉躍進主編『古代文学前沿与評論　第６輯』（社会科学文献出版社、2021）
周佳榮『開明書店與五四新文化』（中華書局、2009）

〈英語（アルファベット順）〉
Lee, Leo Ou-fan. *Shanghai Modern: the Flowering of A New Urban Culture in China, 1930-1945*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1999.
Shih, Shu-Mei. *The Lure of the Modern: Writing Modernism in Semicolonial China, 1917-1937*. Berkeley: University of California Press, 2001.
Wei, Betty Peh-T'i. *Shanghai: Crucible of Modern China*. Hong Kong: Oxford University Press, 1990.
Yeh, Wen-Hsin. *The Alienated Academy: Culture and Politics in Republican China, 1919-1937*. Cambridge: Harvard University Press, 1990.
Yeh, Wen-Hsin. *Shanghai Splendor: Economic Sentiments and the Making of Modern China, 1843-1949*. Berkeley: University of California Press, 2007.

〔付記〕
本稿は、科学研究費【基盤研究（A）『建国初期中国を移動する身体芸術メディア・プロパガンダ：戦時期からの継承と展開』（研究代表者：星野幸代）】の研究分担金の交付を受けて行った研究成果の一部である。

（よう　とう　中国学科）

2021年11月12日受理